

学会レポート Congress Report >>>

会員限定

第40回日本造血細胞移植学会総会のみどころ

同じ場所に集い、心を一つにして次のステップへ

2018.01.18



日本造血細胞移植学会総会の会長を務める豊嶋崇徳氏

第40回日本造血細胞移植学会総会が、2018年2月1日～3日、札幌市のロイトン札幌などで開催される。学会総会のテーマは「未来の造血細胞移植－The Future of Hematopoietic Stem Cell Transplantation－」。会長を務める豊嶋崇徳氏（北海道大学大学院医学研究院血液内科）は、「血液学全体を、大空を悠々と飛ぶ“鳥の目”で俯瞰し、将来を担う若者たちに造血細胞移植の夢を見せたい」と話す。新しい試みが満載の学会総会のみどころをうかがった。

「今でこそ、血液疾患に治療をもたらし得る治療法として造血幹細胞移植は認知されているが、ここに至るまでには、いくつかの重要なステップがあった。少しずつの進歩ではなく、石段をポンと一つ上がるように進化してきた歴史がある。そのきっかけとなったのは、学会という場だった。皆が同じ場所に集い、考えと心を一つにして次のステップへ上がる。学会を再びそんな場にしたい」。豊嶋崇徳氏は、学会総会に込める思いを語る。

すべてのシンポジウムを英語セッションに

集いの場として豊嶋氏が企画したのが、第1会場で開催する5つのシンポジウムだ。シンポジウム1「Immunotherapy in SCT」、会長シンポジウム「The Future of SCT」、教育シンポジウム「How I treat myeloma and related disorders using transplant」、シンポジウム2「Novel Insights in Transplant Biology」、シンポジウム3「Innovative Concepts to Maximize Patient Outcomes」のすべてを英語セッションにした。すべてのシンポジウムを英語化するのは初の試みで、これには、海外から多くのHematologistに参加してほしいという思いもある。日本造血細胞移植学会の参加者数は2,500名を越え、今では米国、欧州の移植学会の規模に匹敵する。豊嶋氏は「それぞれの領域での第一人者をシンポジストとして海外から招聘した。私の意図を理解してもらい、参加を快諾してもらった」と話す。

造血細胞移植学会の起源は、骨髄移植の黎明期の1978年に開催された日本骨髄移植臨床懇話会で、当時の新進気鋭のパイオニアが一堂に会し、骨髄移植の発展のために何をすべきかについての真剣な討議が行なわれた。その後、「基礎医学、臨床医学、看護、検査、薬剤、設備、造血細胞バンクなど、さまざまな領域の専門家が努力を続け、その結果、造血細胞移植は飛躍を続けてきた」と豊嶋氏は振り返り、造血細胞移植の黎明期から、その発展を担ってきたリーダーたちの熱意と努力に敬意を表す。「造血細胞移植をわが国でも実施したいと考えていた彼らは、米国の造血細胞移植学会に参加し、皆が“第1会場”に一日中座り、発表者の話に耳を傾け、会場の熱を肌で感じていた。そして帰国後は、そこで得た知識をもとに、皆で日本の移植医療を一つ上のステップに導いた。その積み重ねが現在のわが国の移植医療の礎になっている」と豊嶋氏は話す。「学会は、最新の知見、技術、治療法を発表する場であり、それを吸収する場であった。そういう学会の原点を見つめ直したい」という。

世界の最新知見を発表者の表情を見ながら聞く

現在の医学会は、参加することで専門医や認定医の資格を取得したり、維持したりする場としての役割が大きくなっている。また、若手の医師や研究者が発表する場という意義もある。しかし豊嶋氏は「学会は論文化の前に、最新の研究成果を発表する場のはず。そして発表内容だけでなく、発表者の口調や表情、質疑応答などを通じて、参加者はその研究の実際の可能性を探っていく。新しいことを学び、その中から医療の発展のために役立つことを選び、広めるきっかけになっていた。今度の学会総会では、その場を提供したいと考えた。第1会場のシンポジウムに耳を傾け、血液学を鳥の目で俯瞰してほしい」と期待する。

豊嶋氏がこう考える背景の一つが、米国留学時代の出来事だ。当時は、欧州でも米国でもミニ移植が行なわれるようになっていた。米国造血細胞移植学会には、日本の各地から移植のリーダーがそれぞれ参加し、わが国でのミニ移植実施の可能性を探っていた。そして留学中の豊嶋氏に、異口同音に「日本でミニ移植ができると考えるか」と質問したという。

「施設の規模も医師の数も違うのに、新しい治療法の導入にける熱意は同じだった」と豊嶋氏。ミニ移植はわが国でも、欧米にそれほど遅れることなく定着した。「同じ場所に集い、新しい知見に触れ、皆で考えることが、移植医療のステップを上げるために重要だということを知った」と豊嶋氏は話す。

初めて設けられたプレナリーセッション

学会総会のもう一つの新企画が、3日目に設けられた「プレナリーセッション」である。今回は3題が選ばれた。「優れた研究内容は、みんなで認め賞賛すべきと考えた。学会で発表されたものに対する評価にメリハリをつけたかった」（豊嶋氏）という。

学会総会のポスターにもこだわりがある。「学会のポスターのデザインは、開催都市のシンボルになっている建物や風景をCG技術で処理して、前面に出すものが多いが、自分はそれは嫌だった。総会スタッフには『誰が見ても冬の北海道を連想し、かつ明るく楽しいものにしてほしい』とだけ注文した」と豊嶋氏。そしてできたのが、雪だるまをモチーフにしたポスターだ（図）。「この総会は北大血液内科、同門会、コングレ、そして有志の仲間による“チームてっしー”の手作りの総会であり、私の自慢です」と豊嶋氏は目を細める。

開催時期が、例年より早くなったのにも理由がある。これまで多くの医学会が開催されてきた、さっぽろ芸術文化の館が、今年3月に廃止となり、しばらくは札幌市での学会開催ができなくなるという。「会場が2月の初めしか空いておらず、こういう日程になった。参加者のご理解をいただきたい」と豊嶋氏は話す。「2月は、最も札幌らしい美しい雪景色が楽しめる。冬の味覚も味わってほしい」。

ただ、雪や氷で滑りやすいため、「足回りはしっかり固めてほしい。滑りにくい靴にスーツなどは似合わない。ドレスコードはカジュアルで」と豊嶋氏は呼びかけている。

会員登録はこちらから (登録・ご利用は無料です) >>>

ご登録いただく…

- 限定コンテンツを含め、すべてのコンテンツが閲覧できます。
- 定期情報誌(年3回発行予定)をお送りします。
- 新着記事をお知らせするメルマガをお届けします。

新着記事 What's New

学会レポート Congress Report >>>

ASH2017 Late Breaking Abstracts Session
LBA #6—Edoxabanによるがん合併のVTEの治療は、標準治療薬であるDalteparinに対して有効性・安全性ともに非劣性であることが明らかに
Gary E. Raskob (College of Public Health, University of Oklahoma College of Public Health, Oklahoma City, OK, USA)

2018.01.25

会員限定

学会レポート Congress Report >>>

ASH2017 Late Breaking Abstracts Session
LBA #4—移植不適応のNDMMに対するDaratumumab+VMP (D-VMP) 療法はVMP療法よりも有効
Maria-Victoria Mateos (University Hospital of Salamanca/IBSAL, Salamanca, Spain)

2018.01.25

会員限定

学会レポート Congress Report >>>

ASH2017 Late Breaking Abstracts Session
LBA #2—R/R CLLに対するVenetoclaxとリツキシマブの併用効果は、ベンダムスチンとリツキシマブの併用よりも高い
John F. Seymour (Peter MacCallum Cancer Centre, Royal Melbourne Hospital, and University of Melbourne, Australia)

2018.01.25

会員限定

学会レポート Congress Report >>>

ASH2017 Late Breaking Abstracts Session
LBA #1—aTTPに対するCaplacizumabの高い効果が明らかに
Marie Scully (Department of Haematology, University College London Hospitals NHS Trust, London, United Kingdom)

2018.01.25

会員限定

この論文に注目! Focus on >>>

2018年1月の注目論文 (Vol. 2)

木崎昌弘 (長崎大学 原爆後障害医療研究所 所長)

2018.01.25

凸版印刷は、東京2020オリンピック・パラリンピックを応援しています。



東京2020オフィシャルパートナー(印刷サービス)



図 第40回日本造血細胞移植学会総会のポスター